

ジョージア工科大学留学

Georgia Institute of Technology

安藤 大介

国立医薬品食品衛生研究所・薬品部

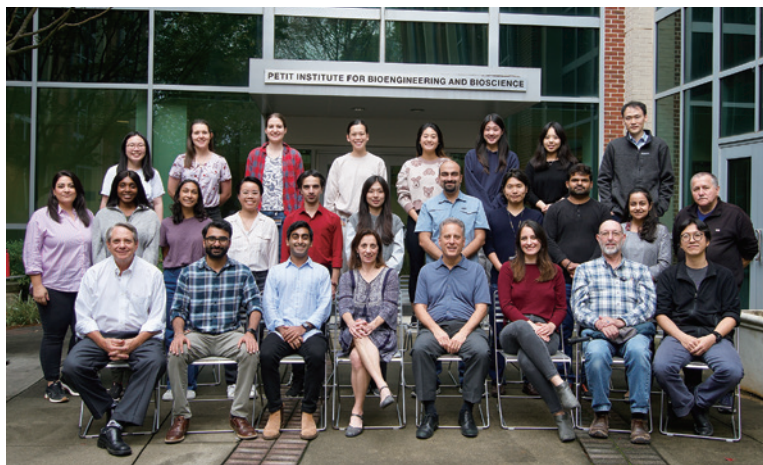
私は、2024年4月から1年間、米国ジョージア州アトランタにあるジョージア工科大学(Georgia Institute of Technology: GT)に研究留学させていただきました。私の受入れ先は、経皮薬物送達システムであるマイクロニードル(MN)を世界で初めて開発した研究者Mark R. Prausnitz教授です。

ラボは約30年の歴史を誇り、所属するほぼ全ての学生とポストドクが日々MNの研究に取り組んでいます。学会や論文で見たPrausnitzラボのMNを、はじめて自分の手で作製したときの感動は忘れられない体験です。私の滞在中には、世界各国(イギリス、イラン、インド、エジプト、韓国、台湾、トルコ、ナイジェリア、バングラディッシュ、ロシア等)から集まった20名程度が在籍しており、研究活動に加えて、異文化交流という意味でも非常に充実した留学生活を送ることができました。アトランタの生活環境や、研究室での気付きは、製剤機械技術学会誌2025年6月号に寄稿していますので、ご興味があればお読みいただければ幸いです。ここでは、留学中における出会いについて、気付いたことや感想を書かせていただきます。

私は、トルコ人との出会いに恵まれました。渡米前にラボの同僚から、彼女の友人Denizが住むアパートを紹介されました。Denizはトルコ出身のポストドクで、GTの物理学科で3年間働いていました。Denizは車を持っていたため、私とDenizの同僚Bahadir(彼もトルコ人です)は毎朝、車に乗せてもらい、一緒に通勤していました。当然、車の中の言語は、英語(ときどきトルコ語)です。

渡米したばかりの私にとっては、英会話の良い練習になりました。留学当初は、周りに相談できる日本人の知り合いはいませんでした。DenizとBahadirに生活のセットアップ(例えば、銀行口座の開設、SSN取得など)、大学周辺の環境や治安などについて、相談することができ、とても助かりました。Denizとは、家族ぐるみの付き合いになり、彼の子供の誕生日パーティーに参加してもらったり(私たち以外はトルコ人でした)、お互いの国の食べ物を持ち寄ってランチを食べたり(お箸の使い方を教えてあげたのは良い思い出です)、妻同士がお茶をしたりと、非常に良い関係を気付くことができました。

また、Denizたちは、物理学科で歩行ロボットに関する研究を行っており、薬学部出身の私にとって、全く分野の異なる彼らの実験室を見学させてもらったことは、非常に貴重な経験でした。また、Denizの勧めもあって、英語学習のために、Buckhead図書館の無料のEnglish as a Second Language(ESL)クラスに通いました。このクラスでは、自分たちの国について、持ち回りで、30分程度の英語のプレゼンをすることになっており、私は日本の富山県を紹介しました。これも良い英語の勉強になりました。学外の知り合いを増やす良い機会にもなり、中国、ブラジル、ウクライナ、エルサルバドル、コロンビアなど、様々な国の人と知り合うことができました。さらに、ESLクラスがきっかけとなり、日系企業の駐在員として来られている日本人夫婦と出会い、美味しい日本食が手に入る場所を教えていただいたり、本当に色々な面で目をかけていただきました。



←ラボの集合写真

前列右から4人目がMark R. Prausnitz教授、
筆者は2列目右から4人目

安藤 大介／ジョージア工科大学留学

また、GTには、日本語学科があります。最近、漫画やアニメの影響で、日本語は人気な科目の一つとなっています。たまたま、GTのJapan dayに日本語学科を訪れたところ、Satomi Suzuki先生と知り合いました。Suzuki先生は、GT学生の日本への留学を支援しており、感銘を受けました。Suzuki先生にご紹介いただいた日本好きの学生とカフェで話をしたり、一緒に食事をとったりする等、ラボ以外の学生と交流を持てたことは米国と日本の教育システムや働き方の違いを考えるきっかけになりました。

ラボでは、毎週金曜日にグループミーティングがありました。ミーティングでは、当番制で、スナックなどの軽食と飲み物を準備することになっています。私は、日本食(たこ焼きやいなり寿司など)を持って行きましたが、好評でした。ラボを旅立つ人がいる場合には、一緒にケーキを食べ、メッセージカードを贈る文化があります。1年間というまとまった期間滞在することによって、お客さん扱いではなく、仲間としての信頼関係を築くことができました。私は英語に自信がありませんが、学生やポスドクに、積極的に質問したり、アドバイスするよう心がけました。基本的に誰もが研究を進めたいと思っているので、自分の経験を話すと拙い英語でも聞いてもらえます。皆がMNに興味を持っており、気軽に相談やディスカッションができ、お互いに助け合う風土が醸成されています。ボスも、「これはXXが詳しいからXXに聞いた方が良い」といったことを良く言ってくれますし、自分のことを話題にあげてもらえたら一人前です。

ボスに自身の働きぶりを知ってもらい、信頼関係を構築するには、それなりに時間がかかります。そういう意味でも、フェローシップは貴重です。海外のポスドクからは、自国のフェローシップで好きな留学先を選べるようなものはない又は非常に少ないと聞いており、日本人はチャンスに恵まれています。研究留学は、得られる知識・経験・人脈の幅が非常に大きいので、是非、チャレンジすることをお勧めします。

最後に、海外留学をご支援くださった上原記念生命科学財団の皆様、国立医薬品食品衛生研究所の皆様、頑張って付いて来てくれた妻にこの場を借りて心より感謝申し上げます。